

幼少期における「生演奏」の重要性の一考察

－「豊かな感性と表現」の自発的な広がりを探る－

佐々木 寿 子	幼児教育科
工 藤 敬 子	学校法人 善行寺学園 天童幼稚園 主幹
佐 藤 千 聡	学校法人 善行寺学園 天童幼稚園 学年主任
青 柳 美 歩	学校法人 善行寺学園 天童幼稚園 教諭

(2020年10月15日受理)

〔 要 約 〕

2018年4月に、新たな幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、保育所保育指針が導入され、「幼児期のおわりまでに育ってほしい姿」が示された。本研究では、アウトリーチコンサートを実際に行っている中で、保護者や保育者へのアンケート調査をもとに、音楽の「生演奏」が幼児期の子どもに具体的にどのような影響を与え、どのように一人ひとりの表現が自発的に広がっていくのかを探った。その結果、「幼児期のおわりまでに育ってほしい姿」に密接に関わり合い、影響していると考えられるに至った。

I. はじめに

2018年4月に、新たな幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、保育所保育指針が導入され、「幼児期のおわりまでに育ってほしい姿」が示された。幼稚園教育要領や保育所保育指針では、小学校学習指導要領と異なり、「～を味わう」、「～を感じる」などのように、いわばその後の教育の方向付けを重視した目標で構成されている。

このような違いがあることから、児童期については小学校学習指導要領において育つべき具体的な姿が示されているのに対し、幼児期については幼稚園教育要領や保育所保育指針からは、その具体的な姿はこれまでそれほど示されていなかった。そこで、文部科学省では、幼児の発達等の状況を踏まえて、具体的なイメージをしつつ、豊かな教育活動が展開されるよう具体例を示した。それが、新たに示された「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」である。

この中には、『健康な心と体』『自立心』『共同性』『道徳性・規範意識への芽生え』『社会生活との関わり』『思考力の芽生え』『自然との関わり・生命尊重』『数量・図形、文字への関心・感覚』『言葉による伝え合い』『豊かな感性と表現』という項目がある。これは5歳児修了時に完全にできるようになる、できるように育てなくてはならないという到達目標ではない。3、4歳児頃からの指導を経て（保育所や認定こども園では0歳児からの保育で）育まれていくものであ

る。このように、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」とは、子どもの完成されたある種の理想的な姿ではなく、それまでに育ってきた姿であり、かつ、これからも育っていく姿なのである。¹⁾

そして、最後に示されている『豊かな感性と表現』は、「心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。」とある。¹⁾ その方法は発達段階に応じて様々であるが、日々の生活の様々な場面の中で、美しいものや心を動かす出来事に触れる経験全てが、『豊かな感性と表現』へと繋がっていくと思う。

そもそも、人間が「人間らしい生き方」をすることとは、物を見て、聴いて、触れて感じ、感動することが出発点になると思われる。感じたり感動したりする「心」が考えることに結びつき、「想像」や「創造」へと繋がっていくのである。その出発点において、『豊かな感性と表現』とは、まさに人間の「心」を育んでいく大切な要素の一つであると考えられる。

II. 幼児期の家庭・保育現場の音楽教育について

幼児期の音楽教育は、子ども自身が自発的にというよりも、物や人など周囲の「環境」を通して与えられ、行うものであり、子どもが学ぶための環境を大人が用

意しなければならないと言うことができるだろう。そしてその「環境」とは、家庭においては保護者が、そして、保育現場においては保育者がその役割を担うものである。

家庭での音楽教育の取り組み方は、各家庭の環境によって大きく異なるものと推測される。そこで、家庭における音楽教育の取り組みについて探るべく、筆者が指導している「音楽教室joujou～ジュジュ～」に通う生徒の保護者に次のようなアンケートを行った。

1. アンケート概要

アンケート実施方法：

個別にメールを送り、返信していただく形で回答を得た。

アンケート実施日時：

2020年7月中旬にメールを送信。回答期限は7月末日までとした。

アンケート対象者：

音楽教室joujou～ジュジュ～

生徒数46名（未就学児9名／小学生以上31名／大人6名）の保護者

※大人の生徒に関しては、自身の子どもに対しての音楽教育についてお答え頂いた。また、兄弟で入会している方が4組いるため、実質は42人の保護者の方からのお答えを頂いた。有効回答率は100%である。

アンケート設問：

問①・保護者の方の音楽経験はありますか？

問②・幼児期（0歳～就学前まで）に、「音楽」の分野でお子さんに実践していたことはありますか？

問③・問②で「ある」「どちらともいえない」と答えた方は、具体的にどんなことを実践していましたか？

問④・未就学児向けのコンサートなどに行ったことはありますか？

問⑤・問④で「ない」と答えた方は、その理由を教えてください。

2. アンケート結果

問①・保護者の方の音楽経験はありますか？

・ある・・・12名
（ピアノ9名・エレクトーン3名との回答）
・ない・・・30名

問②・幼児期（0歳～就学前まで）に、「音楽」の分野でお子さんに実践していたことはありますか？

・ある・・・15名
・ない・・・25名
・どちらともいえない・・・2名

問③・問②で「ある」「どちらともいえない」と答えた方は、具体的にどんなことを実践していましたか？

・童謡のCDを聞かせていた。
・午睡時に、童謡やクラシックなどの音楽を流していた。
（0歳から2歳まで）
・童謡を歌ったり、車の中でCDを聞かせていた
・リトミック教室に通っていた。
・ピアノを弾いて聴かせていた。
・リズム遊びや、ベビーマッサージのようなことは実践していた。

問④・未就学児向けのコンサートなどに行ったことはありますか？

・ある・・・5名
・ない・・・37名

問⑤・問④で「ない」と答えた方は、その理由を教えてください。

・未就学児も入れるコンサートがあることを知らなかった。
・子どもが騒いだりするのが嫌で連れて行ったことがない。
・子どもが興味を持つのかわからなかった。
・自分自身がそのようなコンサートに興味をなかった。
・特に理由がない

3. 考察

音楽経験者で、なおかつ、保護者自身が子どもに歌を歌って聞かせたり、ピアノを弾いたりという家庭は42名中僅か4名であり、それ以外の家庭では、音楽経験の有無にかかわらず、童謡のCDを車に乗っている時に聞かせるくらいで他には特に何もしていないという回答が多かった。家庭の中で、保護者が歌ったりするような、いわゆる「生の音楽」に触れる機会はさほど多くないことがこのアンケートでも読み取ることが出来る。

問④の、未就学児向けなどのコンサートには、5名の保護者が行ったことがあると回答した。なお、5名の保護者はいずれも音楽経験者であった。いわゆる「ファミリーコンサート」や、筆者が主催している「0歳から聴けるコンサートシリーズ」へ足を運んだとの回答であった。

問⑤では、やはり未就学児が入れるコンサートがあることを知らない、興味がなかったという回答が多かった。音楽経験がないので、どこでそのようなコンサートの情報を得るのがわからなかったとの声もあった。子どもが騒いだりするのが嫌で連れて行ったことがないという回答は、同様の意の回答が10名から得られた。やはり、「未就学児入場可」となっていて

も、子どもが周りに迷惑をかけてしまいそうで気後れしてしまい会場に行けないという保護者が少なくないと推測される結果となった。

一方、子どもが大半の時間を過ごすであろう幼稚園・保育園においては、普段の生活の中で手遊びや童謡を歌う、音楽を流しながら踊りを踊るというような活動はあるが、あくまでも毎日の生活の中に自然に取り入れられているものであり、特別に「音楽教育」をするという形ではない。(後述する、天童幼稚園の先生方へのアンケートからもその点を読み取れる。) また、保育施設においてはすべての保育者が音楽教育に携わる構造になっており、必然的に音楽を専門としない指導者からも指導を受ける形となる。このため、各保育者の音楽的な技術格差が、子どもたちの活動内容やレベルに直接影響する問題も抱えているという側面もあることが言える。²⁾

Ⅲ. 音楽アウトリーチ活動・乳幼児対象のコンサートについて

それでは、子どもたちが音楽をもっと身近に感じ、生活の中に取り入れられ、発達の段階によって音楽そのものに対して自ら興味を持つことが出来るようになるにはどのような方法があるのだろうか。その方法の一つとして、1990年代後半より音楽の分野においてもその概念が知られるようになった、音楽アウトリーチ活動が挙げられる。

そもそもアウトリーチとは、英和辞典によると、「1、手を伸ばすこと、差しのべること2、(地域社会への)奉仕(助・福祉)活動(公的機関・奉仕団体の)現場出張サービス」といった意味で訳されている。

学校教育での音楽アウトリーチ活動は、1998年の学習指導要領改訂以降、学校の授業に音楽家が参入する機会が増えたことが契機になり、広がりを見せた。オーケストラが各学校で演奏するなどの、いわゆる「芸術鑑賞教室」はそれ以前から行われていたが、アウトリーチ活動が従来の鑑賞教室と違うのは、実際に音楽を体験できるような試みが行われたり、演奏者が子どもたちと直接交流するなどの体験ができることである。²⁾

一方で幼児を対象とした音楽アウトリーチ活動は、小・中学校のような教育制度に起因した広まりではないものの、保育施設へ音楽家が出向き、生演奏を聴かせるという形で行われるようになった。保育施設主催によるアウトリーチコンサートについては年々増加の一途をたどっており、そのことは他団体の公演活動からも読み取ることが出来る。^(註1)

また、乳幼児や未就学児を対象としたコンサートについても、全国的には少しずつ広まりを見せている。全国のコンサート情報が記載されているインターネットサイトでは、クラシックのコンサートで「未就学児入場可」と明記されているコンサートが、2020年8月から2021年7月にかけて全国で46件あると記載されていた。もちろんこれは前述のインターネットサイトに登録し、掲載しているコンサートに限っての件数であり、実際にはもっと小規模のコンサートで「未就学児入場可」となっているコンサートも多く、公共ホール以外の場所でのコンサートとなると、かなりの数のコンサートが行われていると推測される。

一方、山形県においては、公共ホール(山形テルサ・文翔館議場ホール・川西町フレンドリープラザ・伝国の杜・置賜文化ホール・シェルターなんようホール・やまぎんホール・山形市民会館・響ホール・白鷹町文化交流あゆむ等)で過去4年間に行った自主事業及びコンサートのうち、乳幼児を対象としたコンサートは以下の通りとなっている^(註2)(表1)

表1 山形県内に於ける乳幼児を対象としたコンサート数(2016~2019)

年	自主事業及びコンサート数	乳幼児対象のコンサート数
2016	69	3
2017	98	3
2018	97	6
2019	155	5

上記のように、山形県内においては、乳幼児を主に対象としたコンサート数は少しずつ増加してはいるが、全体的に見るとあまり多くないのが現状である。もちろん、上記のコンサートの中では、「未就学児入場可」としているコンサートもあるが、ほとんどがクラシックのコンサートであり、会場内や演奏中は「静かに聴く」ことが求められるため、実際に子ども連れで演奏を聴くことは保護者にとってもハードルが高いものになっているのは想像に難くない。

そこで、公共ホールのような規模の大きいホールでは無く、気軽に入場できる小さな会場でのコンサートの需要が近年、全国的にも、そして山形県内に於いてもますます高まっているようだ。

以上の通り、音楽アウトリーチ活動・乳幼児対象のコンサートについては、近年、非常に需要が高まっはいるものの、コンサートの規模や内容については、来場者にとって快適に過ごせるように工夫し、様々な

面に気を配りながら実践していかなければならないと感じた。

IV. 音楽アウトリーチ活動の実践事例

2014年に筆者である佐々木寿子（ソプラノ）・駒込綾（ヴァイオリン）・沼澤美智子（ピアノ）・太田真由美（パーカッション&スティールパン）の4名が、クラシックユニット「Bouquet de Bijoux（ブーケ ドゥ ビジュー）」を結成した。同時に、自主企画として、0歳から未就学児を主に対象にしたコンサート「0歳から聴けるコンサートシリーズ」をスタートさせた。

前述のように、コンサート会場は往々にして「静かに聴かなければいけない」ため、最初から「未就学児不可」としているコンサートは非常に多い。たとえ「未就学児可」となっているコンサートだとしても、子どもが泣いたり騒いであって、他のお客様に迷惑をかけてしまうのが心配でコンサートに行くことを躊躇してしまうというのが、先に述べた現状である。このことは、メンバーのうち3名が出産を経て、子育てをしている中で感じ、また、実際に体感したことでもある。まずは生演奏を、気軽に自分の子どもたちに体験させたいというのが、「0歳からのコンサートシ

リーズ」を企画した最初の思いであった。また、前述のように、各家庭において音楽を身近に取り入れるということは、必ずしも容易なことではないことから、音楽をより身近に、そしてある種のインパクトをもって伝える方法は、やはり演奏者と対面しての「生演奏」なのではないかと考えるに至った。

以上のことから、「0歳から聴けるコンサートシリーズ」は、0歳から未就学児を主に対象とし、生演奏の音楽に触れる機会を通し、また一緒に歌ったり楽器を叩いたりすることによって、子どもたちだけでなく保護者にも音楽を身近に感じてもらいながら、家庭での音楽教育の導入をスムーズに行う事を目的の一つとしている。そして、泣く・笑う・興奮する・騒ぐなど、環境や音楽に対する子どもたちの自然な反応を決して否定せずに、ありのままの姿を表現する場にしてほしい、その姿を、保護者もまた否定せずに一緒に楽しんでほしいとの思いを強く持ち、様々な面で工夫を重ねている。

また同時に、幼稚園、保育園からの依頼によるアウトリーチコンサートや、子育て支援センターでのアウトリーチコンサートなどを積極的に行っている。これまでの活動は以下の通りである（表2）（表3）

表2 0歳から聴けるコンサートの活動実績

	日時	コンサート名	会場
Vol.1	2014年12月 13日・20日	クリスマスコンサート	天童教会／ 山形テルサ リハーサル室
Vol.2	2015年7月12日	コンサートタイトル無し	山形テルサ リハーサル室
Vol.3	2015年12月19日	コンサートタイトル無し	山形テルサ リハーサル室
Vol.4	2016年9月4日	コンサートタイトル無し	山形テルサ リハーサル室
Vol.5	2017年2月5日	鬼もウキウキ ヴァレンタインコンサート	山形テルサ リハーサル室
Vol.6	2017年8月6日	夏だ！海だ！人魚姫コンサート	山形テルサ リハーサル室
Vol.7	2017年11月23日	親子で楽しむ 秋の空コンサート	山形テルサ リハーサル室
Vol.8	2018年6月24日	雨でもワクワク！虹色コンサート	山形テルサ アプローチズ
Vol.9	2019年2月24日	春はすぐそこ！ぼかぼかコンサート	山形テルサ リハーサル室
Vol.10	2019年8月17日	第十回記念 音の宝石箱コンサート	山形テルサ リハーサル室
Vol.11	2020年1月26日	みんなで祝おう！ニューイヤーコンサート	山形テルサ リハーサル室



写真1 0歳から聴けるコンサートの様子

表3 その他の活動実績
(アウトリーチコンサート及び子育て支援センター等主催のコンサート)

日時	コンサート名	会場	主催
2014年3月13日	卒園記念コンサート	天童幼稚園	天童幼稚園
2015年5月8日	創立記念コンサート	山形養護学校 体育館	山形養護学校
2015年12月1日	ミニクリスマスコンサート	天童市わらべ館	天童市わらべ館
2016年4月19日	春のコンサート	天童市わらべ館	天童市わらべ館
2016年5月10日	創立記念コンサート	山形養護学校 体育館	山形養護学校
2016年12月17日	クリスマスコンサート	つぐみ保育園	つぐみ保育園
2017年2月7日	冬のコンサート	天童市わらべ館	天童市わらべ館
2017年5月10日	創立記念コンサート	山形養護学校 体育館	山形養護学校
2017年11月2日	秋祭りスクールコンサート	長岡小学校 体育館	長岡小学校
2017年12月5日	クリスマスコンサート	天童市わらべ館	天童市わらべ館
2017年12月12日	クリスマスコンサート	嶋保育園	嶋保育園
2018年3月6日	春よ来いコンサート	天童市わらべ館	天童市わらべ館
2018年5月10日	創立記念コンサート	山形養護学校 体育館	山形養護学校
2018年9月20日	リニューアルオープン記念コンサート	天童市わらべ館	天童市わらべ館
2018年10月10日	にこにこサロンミニコンサート	河北町ひなの子育て支援センター	河北町子育て支援センター
2019年3月21日	春ぼかぼかコンサート	天童市わらべ館	天童市わらべ館
2019年5月10日	創立記念スクールコンサート	山形養護学校 体育館	山形養護学校
2019年6月29日	10周年アニバーサリーコンサート	嶋保育園	嶋保育園
2019年10月2日	父兄祖父母参観ミニコンサート	さくらんぼ幼稚園	さくらんぼ幼稚園
2019年10月29日	祖父母参観ミニコンサート	天童市立舞鶴保育園	天童市立舞鶴保育園
2019年11月1日	祖父母参観ミニコンサート	天童市さくら保育園	天童市さくら保育園
2019年12月10日	みんな一緒にクリスマスコンサート	河北町どんがホール	河北町子育て支援センター
2019年12月13日	クリスマスミニコンサート	天童市わらべ館	天童市わらべ館
2020年10月1日	スクールコンサート	山形養護学校 体育館	山形養護学校



写真2 子育て支援センターでのコンサートの様子

0歳から聴けるコンサートシリーズ・アウトリーチコンサート共に、プログラムは実施される季節や対象の子どもの年齢に合わせて選曲している。また、主催である各施設の先生方と事前に打ち合わせをし、実際に各施設を見学して雰囲気確かめてから選曲している。

依頼を受けたアウトリーチコンサートは基本的に一回公演だが、自主企画である「0歳から聴けるコンサートシリーズ」は午前と午後の二回公演をしている。当初は来場者が多いため混雑しないように二回公演にしたが、コンサート当日に子どもたちの機嫌や午睡の状況を見て、どちらの回に行くか判断することができるので非常に良いとお声を頂いたため、現在、午前の部は11時スタート、午後の部は13時スタートという流れになった。なお、午前・午後とも同一プログラムであり、完全入れ替え制となっている。

表4 プログラムの概要

プログラム	各プログラムの留意点
①オープニング	特に決まった楽曲は無く、開催時期や対象年齢によって様々な曲を演奏している。会場の扉の外から登場し、特別な場所であることを印象付ける。
②親子で手遊びができる楽曲	季節に合わせて、幼稚園、保育園でも歌っているような曲を意識し選曲することが多い。
③各楽器（声楽・ヴァイオリン・パーカッション・ピアノ）の特性が分かる楽曲	クラシック音楽を中心に選曲することが多い。ここで各楽器の紹介をし、さらに興味を持たせるようにする。
④耳を澄まし、静かに聴くことができる穏やかな楽曲	季節に合わせた童謡を選曲することが多い。
⑤体を動かして踊りながら歌える楽曲	簡単な振り付けができる楽曲を選んでいる。振り付けは必ず最初に何度か練習をし、その後全員で演奏する。
⑥一人一人に楽器（タンバリン・マラカス・カスタネット等）を渡し、楽器を鳴らしながら演奏に参加できる楽曲	特に決まった楽曲は無いが、子供たちにとって耳馴染みのある楽曲を選曲することが多い。
⑦エンディング	全員で歌い、楽器を鳴らして演奏に参加できる楽曲を選曲することが多い。

※0歳から聴けるコンサートシリーズ・アウトリーチコンサート共に、大まかな流れは変わらず、対象年齢や演奏時間などに配慮しながら、細かくその都度変更している。

表5 プログラム構成にあたり、全体的に留意している点

<ul style="list-style-type: none"> ・未就学児の集中力が続く時間を考慮し、約30分～約45分の間で全体のプログラムを終了する。 ・プログラムの緩急をつけ、子どもたちが飽きないように編成する。 ・各楽器の特性が分かる楽曲を入れ、各楽器の説明を取り入れることによって、クラシック音楽への興味を持たせる。 ・保育園や幼稚園で歌われている曲や手遊びを入れたり、体を動かすことによってただ聴くだけでなく多角的に音楽に触れ、楽しめるようにする。 ・一人ひとりに何らかの楽器を渡し、自由に叩けるようにする。（状況によって、楽器の種類はそれぞれ異なる。） ・生演奏である楽しさを感じられるような楽曲を選曲する。 ・季節に合わせたドレスを着用し、視覚的にもインパクトがあり楽しめるようにする。

※なお、上記は0歳から聴けるコンサートシリーズ・アウトリーチコンサートに共通する事項である。

表6 0歳から聴けるコンサートシリーズで特に留意している点

<ul style="list-style-type: none"> ・ゴザを敷き、より親子で密着してスキンシップがとれるようにしている。 ・演奏中の出入りは全て可能にし（会場の入口は開演中も開いたままにする）、気兼ねなく演奏を楽しめるよう配慮する。 ・曲間には必ず演奏者のトークを入れ、その際に入出りがしやすいように配慮する。 ・事前アナウンスで、演奏中に泣いたりおしゃべりをしても「お互い様」の心で受け入れていただくようお願いする。 ・静かに聴いてほしい曲は事前に曲説明でアナウンスするが、乳児などで咄嗟に泣いたり声が出てしまったとしても、注意せずについてほしいとお願いする。（子どもの発達段階によって、各保護者の判断にある程度はゆだねるようにする。） ・授乳スペース、おむつ替えシートを用意し、小さな赤ちゃん連れの方でも訪れやすい環境を整える。 ・演奏者の後ろに大きいスクリーンを用意し、そこに曲の歌詞や場合によってはイラストなどを映しながら演奏し、より、一緒に歌いやすい環境を作る。
--

「0歳から聴けるコンサートシリーズ」では、毎回、来場の保護者にアンケートを実施。毎回同じ設問を設け、リサーチを重ねてきた。以下は、過去11回のアンケートを一部抜粋したものである。

1. アンケート概要

<p>アンケート実施方法： 来場した保護者にアンケート用紙を配付。終演後、受付にて回収した。</p> <p>アンケート対象者： 子ども連れに限らず、すべての大人の方。なお、入場人数に対してのアンケート回収率は各回を平均して約80%程度である。</p> <p>アンケート設問： 問①・今日の演奏で良かった曲 問②・今後聴いてみたい曲 問③・演奏に関しての感想や気づいた点</p>
--

問①・今日の演奏で良かった曲

<p>あさぺら／つらら／アンパンマンマーチ／パプリカ／赤鬼と青鬼のタンゴ／ひっつきもっつき／あめふりくまのこ／となりのトトロ／ラデツキー行進曲（曲あてが楽しかった）／小さな世界／にじのむこうに／バスに乗って／アナと雪の女王メドレー</p> <p>他</p>
--

問②・今後聴いてみたい曲

<p>ジブリの曲／てあそびのうたをもっと増やしてほしい／おにのパンツ／ほよん行進曲／ディズニーメドレー／魔女の宅急便メドレー／美女と野獣／いないいないばあっ！の曲／有名なクラシックがもっと聴きたい</p>
--

問③・演奏に関しての感想や気づいた点

- ・初めて聴いた曲もあったがどれも素敵だった。次回もぜひ参加したい。
- ・バックに映像で絵や歌詞があり、分かりやすく口ずさみ、楽しむことができた。
- ・毎回、子供も楽しみにしている。
- ・じっとして聴く練習のできる曲と、からだを動かして楽しめる曲のバランスがよくて楽しめた。
- ・小さい子供を連れての演奏会に行きたいと思っていたので、来れてよかった。子供も歌うように声を出したり、ドラムの音に興味を示したりととても楽しめたようだった。
- ・知らない曲でも楽しく聞くことができてよかった。赤ちゃんなりに楽しんでた様子だった。
- ・楽器の演奏が一緒に出来たり、子供が好きな曲が多くあり楽しめた。
- ・アットホームな感じでとても良かった。
- ・歌詞が見ることができてよかった
- ・なごやかで、楽しくてとても良かった。これからも続けてほしい
- ・子どもが小さい頃、子守歌で歌っていたのを思い出し、懐かしさとともに感動した。自分の子どもがこんなに音楽が好きだと思っていたのがなかったので非常に良い時間だった。
- ・会場みんなが楽しそうでとてもよかった
- ・気軽に来れて、無事にコンサートデビューできた。
- ・大人も楽しめた。
- ・子どもが参加できるところがすごくよかった。
- ・大人が聴いても心地よく、楽しかった
- ・クラシックをプログラムの中に混ぜていてよかった。
- ・自由にくつろいで聴けるところがよかった。
- ・子どもが騒ぐのが気がかりだったが、みんなで一緒に声を出したりできたので良かった。
- ・初めて会う他の子どもたちとも交流することができた。
- ・出入り自由というところがありがたかった。
- ・部屋が広すぎず、演奏者を近くで観られたので楽しかった。
- ・ゴザを敷いていたので、乳児が寝ることができてよかった。
- ・パーカッションの楽器名を初めて知り、また、演奏を聴いていつも以上に感動した。
- ・ピアノを習っている娘は、指にくぎ付けだった。
- ・授乳スペースがあり、今回は使用しなかったが、授乳できるという安心感がありました。

2. 考察

問①では、やはり耳馴染みのある曲がより楽しんで聴けるようだが、知らない曲やクラシックの難しい曲でも、「生演奏」という、聴くだけでなく観るということも加わったある種の緊張感があるからか、飽きずに聴くことが出来、また、心に残ったようである。

問②では、問①と同じく、子どもたちが知っている曲や、今流行っている曲を希望する声が多く見られた。また、手遊びが入っている曲という希望もあった。

問③では、初めての参加だったが楽しかった、また聴きたいという声が多数寄せられた。また、子ども同士の交流も見られ、初めて会う子どもたちが自然に

会話したり、一緒になって体を動かしたりと、「生演奏」を聴くだけではない楽しみが生まれていたようだった。プログラムの構成については、曲の緩急をつけて構成すると子どもたちの集中力が高まることが分かった。クラシックの曲も入れながら、子どもたちだけでなく保護者も参加型のプログラムを入れることによって、和やかな雰囲気の中でリラックスしながら音楽を楽しめるようだった。

さらに、出入りを自由にしたり、声を出したり子どもが泣いてしまったとしてもそれを咎めない雰囲気づくり、ゴザや授乳スペース、おむつ替えスペースを設置することによって、保護者がより安心してコンサートに足を運んでいるということもアンケートから読み取ることができた。

3. 演奏者の視点からのコンサートの様子

コンサートの雰囲気やアンケートを参考に、毎回の公演後にメンバーで打ち合わせと次回への課題を話し合っている。(表7)

表7 演奏者の視点からのコンサートの様子

- ・各回のアンケートや実際に来場者に話を聞く中で、家庭ではなかなか実践できないため、生演奏に気軽に触れさせてあげたいという思いを持つ親が多く、来場者が回を重ねるごとに増えていることに驚いている。
- ・子どもとのスキンシップの1つとして、家で何かしらの曲を歌う際、0歳児であっても好きな音楽とよくわからない音楽での反応が分かれてくるので、成長していくにつれて個人の好みがはっきりとしていくように感じる。
- ・コンサート中は親子で密着しているため、とても安心した空間の中で音楽に触れ、思い思いに体を動かしたり歌ったりできることは心の安定につながると感じる。
- ・何回も聴きにきてくださっている方の中には、音楽に興味を示してピアノやヴァイオリンを習うきっかけになった子どもたちも多い。
- ・知識がないからこそその新しい「音」への興味をもつ反応は多様で、泣く、目を大きく見開いて観察する、笑う、叫ぶ、身体を動かす、という反応は、現場で響きを体感する事により、より一層反応が大きくみられるのではないかと推測される。
- ・進行において一番気をつけたのは、なによりも保護者が興味を持ってくれることである。親の空気感が子どもの感覚に絶対的な影響を見せることから、保護者が情報に驚きを見せたり、楽しくて笑ったりすると、子ども側からのこちらへの距離感がぐっと縮まる事がわかった。

上記のように、演奏者自身も感じていた通り、家庭ではなかなか味わえない「生演奏」を体験させたいという思いを持った保護者が多く、来場者が回数を重ねるにつれて多くなっていくのが驚きでもあり、喜びであった。また、コンサート中に親子で密着している

(膝の上へのせたり、また、プログラムの中には親子で一緒に踊ったりスキンシップをはかる場面があるため)ので、子どもたちは安心した空間の中で音楽に触れることが出来ていると感じる。

この「0歳から聴けるコンサートシリーズ」がきっかけとなり、ピアノやヴァイオリンを習い始めた子どもも多く、「生演奏」の必要性を、回を重ねる毎に感じている。

V. 幼稚園でのアウトリーチコンサートを通しての考察

前述の「0歳から聴けるコンサート」の子どもたちの様子やアンケート結果、各施設でのアウトリーチコンサートを経て、さらに深く、生演奏が子どもたちに及ぼす影響を探りたいと感じた。また、コンサートではその時だけ会う子どもたちがほとんどであるため、普段の子どもたちの様子についてまでは知ることが出来ない。そのため、普段の園生活での音楽活動の実態についても詳しく探っていく必要を感じた。そこで、アウトリーチコンサートの際に、先生方に詳しくアンケートを取り、またお話をお伺いして、子どもたちの様子を探った。

1. アウトリーチコンサート実施の概要

日時：2018年3月7日 10時～全園児対象ステージ／ 10時40分～卒園児対象ステージ
会場：学校法人 善行寺学園 天童幼稚園 お遊戯室
参加者：学校法人 善行寺学園 天童幼稚園 全園児と先生方
実践者：「Bouquet de Bijoux (ブーケ ドゥ ビジュー)」
コンサート名：卒園おめでとうコンサート

このアウトリーチコンサートは、筆者が天童幼稚園出身であり、筆者が在園時に担任だった先生方が現在も天童幼稚園にいらっしゃることから依頼を頂き実現したものである。なお、「Bouquet de Bijoux (ブーケ ドゥ ビジュー)」結成当時の2014年3月にも依頼を頂き演奏しているため、天童幼稚園でのコンサートは2回目である。

プログラム選曲に際し2度、幼稚園の先生方と打ち合わせを行った。打ち合わせは天童幼稚園にて行ったため、在園児の普段の様子も見聞きすることができた。

天童幼稚園は私立幼稚園であり、3歳未満児クラス(1クラス)・年少クラス(2クラス)・年中クラス(3クラス)・年長クラス(3クラス)と、園児数の多い幼稚園である。3歳未満児も当時約20名在園していたため、園から、コンサートを「全園児対象ステージ」と、「卒園児(年長児)対象ステージ」の、2回に分けて実施するご提案を頂いた。演奏時間も、子どもたちの普段の様子から全園児ステージは約30分とし、

表8 全園児対象ステージ(演奏時間約30分)プログラム

プログラム	演奏形態	詳細・留意点
にじのむこうに	歌・ヴァイオリン・ピアノ・打楽器	「おかあさんといっしょ」でも流れている楽曲。
天童幼稚園の歌	歌・ヴァイオリン・ピアノ・打楽器	園児・先生方・園長先生と一緒に演奏した。
春の童謡メドレー ～春が来た～春の小川～	歌・ヴァイオリン・ピアノ・打楽器	分かりやすい童謡2曲を選曲。事前に各クラスで先生方に紹介していただいたり、歌っていただいたりしていた。
剣の舞	ヴァイオリン・木琴・ピアノ	ヴァイオリン・打楽器・ピアノの楽器紹介も行った。 ・ヴァイオリン→材質の説明 ・打楽器→各楽器の音の違いを実際に演奏 ・ピアノ→材質の説明
はらぺこあおむし	歌・ヴァイオリン・スティールパン・ピアノ	普段から園で大型絵本の読み聞かせをしているという事だったため、園の先生方に大型絵本をめぐっていただき、普段とは違った角度からはらぺこあおむしを体験出来るよう選曲した。
キッチン・オーケストラ	歌・ヴァイオリン・打楽器・ピアノ	手遊びの練習をしてから園児と演奏
小さな世界	歌・ヴァイオリン・打楽器・ピアノ	園児と手拍子しながら演奏

表9 卒園児向けステージ（演奏時間約20分）プログラム

プログラム	演奏形態	詳細・留意点
ありがとうさよなら	歌・ヴァイオリン・打楽器・ピアノ	卒園ということを意識する選曲にした。
ロンドン橋落ちちゃう！	ヴァイオリン・打楽器・ピアノ・鍵盤ハーモニカ（2台）	筆者と年長児の担任の先生で鍵盤ハーモニカを担当。耳馴染みのある童謡（やぎさんゆうびん・ロンドン橋・桃太郎等）がたくさん入っている曲のため、演奏後に曲あてゲームを行った。
春の童謡メドレー ～朧月夜・さくらさくら・花～	歌・ヴァイオリン・打楽器・ピアノ	全園児対象の時よりも演奏時間を長めにした。事前に各クラスで先生方から楽曲の紹介をしていただいた。
もうすぐ立派な一年生	歌・ヴァイオリン・打楽器・ピアノ	年長児が卒園式で演奏する予定の曲だったため、一緒に演奏した。
切手のない贈り物	歌・ヴァイオリン・打楽器・ピアノ	演奏者から園児に向けて、「はなむけの曲」として演奏。

休憩と移動を挟み緩急をつけながら進行していったほうが良いとのアドバイスを頂いた。

コンサートタイトルである「卒園おめでとうコンサート」は、幼稚園からの巢立ちということで当初お別れコンサートという名前も検討されたが、幼稚園や先生、友達とのお別れというマイナスな言葉ではなく、小学校への期待や新しい生活への楽しいイメージを持ってもらいたいという園からの希望により、「卒園おめでとうコンサート」というタイトルに決定した。

選曲に際しては、これまで行ってきたアウトリーチコンサートでのプログラムの中から特に反応の良かった曲や、春の季節にふさわしい曲を筆者が提案した。先生方からは、卒園式に向けて園児が練習している卒園の曲や、普段の園生活ではなかなか触れ合えない、日本の童謡も演奏してほしい、演奏に子どもたちや先生を参加させてほしいとの希望をいただいたため、メンバーで話し合い、プログラムを決定した。プログラムは以下の通りである（表8）（表9）

2. 終演後のアンケート実施概要

天童幼稚園の「卒園おめでとうコンサート」が終わった後、筆者が改めて天童幼稚園を訪問し、園児の様子などについて先生方からお話をお聞きした。また、アンケートにもお答えいただいた。

アンケート実施方法：

天童幼稚園を訪問し、口頭と書面にてアンケートを実施。

アンケート実施日時： コンサート終了後

アンケート対象者：年長児の担任の先生方3名
（主幹・工藤敬子先生／学年主任・佐藤千聡先生／青柳美穂先生）

アンケート各設問：

- 問①・普段の園での音楽教育について（各学年ごとの特徴）
- 問②・コンサート実施前の園児の様子
- 問③・コンサート実施中の園児の様子
- 問④・コンサート実施後の園児の様子

問①・普段の園での音楽教育について

【満3歳児及び年少児】

- ・初めての集団生活ということで、園生活に慣れることが目的であり、目標である。
- ・音楽活動で何かを得ようという意識を持つのではなく、印象を言葉で表現（ふらふら・ゆらゆら）、生活の中の音、人や動物を真似た擬声語・擬音語を中心に、リズム遊びのような形で取り入れている。また、覚えやすい単純な曲を選曲し、保育者が繰り返し歌うことによって自然に身に付き、保育者が話した言葉に反復した曲も取り入れ、共に楽しく活動している。
- ・保育の場にも多くの音楽が用意されており、気持ちの切り替えを促すために手遊びやリトミックの動きも取り入れるなど、クラス活動にスムーズに移行できるようになっている。
- ・廃品を利用してマラカスや太鼓を製作し、遊びの中に取り入れている。保育者の姿を見て自分も弾いているような行動が見られ、楽器に対する興味も見られるようになった。

【年中児】

- ・感じたことを自分なりに表現して楽しむという目標を掲げ、年少児で歌っていた曲をもとに、園児が歌いたい曲を選び取り入れている。
- ・鈴、タンバリン、カスタネット等の本物の楽器に触れ、活動に取り入れている。
- ・リズム遊びなどは、歌に合わせて自分の感覚で自由に表現することを楽しんでいる。
- ・お遊戯会の選曲等も担任の意思だけでなく園児が主体となって決め、園児の意欲を引き出せるようにした。
- ・静かに音楽を聴くということも教え、音楽の強弱や速さ、曲調の変化に対する気づきも生まれてくる。

【年長児】

- ・生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむという目標を掲げている。
- ・会話の中でも擬態語や擬声語を上手に表現し、身振り手振りに表現している姿が見られる。
- ・季節の歌だけでなく、流行りの曲や兄弟が歌っている曲を歌いたいという意欲も現れてくる。また、曲の習得も早くなり、歌詞の意味もきちんとイメージし、歌うことができるようになってくるため、意図的に長い曲にも挑戦してするようにしている。
- ・運動会での鼓笛では、太鼓・大太鼓・シンバル等の本物の楽器に触れ音楽に合わせて表現することで演奏する楽しさや友達と一つの曲を作り上げる楽しさを感じられるよう活動している。また、他の人が頑張っていることを認めてあげられるという気持ちも現れ、自分のことだけではなく、周りも意識しながら自分の楽器を奏でることができるようになった。
- ・表現する喜びを自分なりに感じるという意識が高くなり、地域のイベントに参加した際はお客様に見てもらい喜びも感じていたようだった。

- ・ピアノを習っている園児も多かったが、新たにピアノを習い始めたという園児もいた。また、友達の前でピアノを積極的に披露する姿も見られた。
- ・コンサートが開催された時期は、学校に行ける嬉しさと、友達と別れる寂しさもある時期だったため、生演奏を聴くことが心の安定に繋がったようだった。

問②・コンサート実施前の園児の様子

- ・全園児に共通して、「コンサート」という言葉自体を聞いたことがない、全く初めての体験である園児が多かった。
- ・保護者が普段聴かせている曲も歌謡曲がほとんどで、クラシックや外国の曲を聞いたことがない園児もいたが、コンサートという催しにとっても期待をしていた。
- ・歌う時に、大きな声で歌いましょうと園児に伝えると、音量をコントロールできずに怒鳴るような声で歌う園児もいた。

問③・コンサート実施中の園児の様子

- ・演奏者が全員ドレスを着ていたため、まずその衣装に驚きを隠せない様子だった。
- ・楽器もこれまでに見たことのないものもあり、衣装をふくめて「特別なもの」という気づきがあった。
- ・年長児の担任がドレス姿と一緒に演奏に参加する場面があり、驚きと共に一緒に演奏することに対する憧れも生まれたようだった。
- ・卒園児のステージで卒園の歌と一緒に歌う場面では、普段歌っている曲と生演奏で歌う歌の違いに驚きつつも、一緒に歌える喜びが生まれていたようだった。自然に、「綺麗な声で歌おう」と努めているのが感じられた。
- ・全園児が、とても集中して演奏や話に耳を傾けることができ、改めて、本物に触れる生演奏の大切さに保育者が気付かされた。

問④・コンサート実施後の園児の様子

- ・幼稚園のピアノは、普段、園児は使用禁止になっているが、各クラスでキーボードを遊びに取り入れたところ、喜んで弾く様子が見られた。
- ・自由に音を出すよりも、自発的に「曲を演奏したい」という気持ちが芽生えていたようだった。

3. 考察

問①では、年齢毎の発達段階に応じて目標を設定し、一年間という長い期間をかけて目標を達成するように様々な角度から音楽教育を行っていることが読み取れた。

しかし、前述したように、特別に時間を取って音楽教育を行っているわけではなく、あくまでも生活やカリキュラムの一部として自然に音楽を取り入れていることが分かった。未満児・年少児では生活の中のいろいろな物を表現する、年中児では自分で感じたことを自分なりに表現する、年長児では生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむという目標があり、まさに、文部科学省が示している「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の中の『豊かな感性と表現』に沿って教育を行っていることが読み取れた。

問②で印象的だったのは、普段の園生活で、季節の歌などを歌う場面はたくさんあるが、歌うときにどのように歌ったらよいか分からず、先生方が「大きな声で」や、「もっと元気に歌いましょう」などと声掛けをすると怒鳴るように歌う子どもたちが多く見られるという点である。これは、どのように指導したら怒鳴らずにきれいな声で歌わせられるのかという、お話を聞いた先生方の共通の悩みとしても挙げられていた。

上記のお話を踏まえた上で、問③を見てみると、演奏者と一緒に歌える喜びと共に、自然に「綺麗な声で歌おう」と努めているのが感じられたという点が非常に重要ではないかと思われる。普段とは違う環境の中、ある種の緊張感のある空間の中で、園児の歌うことに対する意識が変わった瞬間だったのではないだろうか。実際に筆者は園児と一緒に歌っているが、非常に綺麗な声で丁寧な声で歌っているのを感じていた。このことから、園児が自発的に「綺麗な声で歌おう」ということを表現していたとすることができるだろう。

問④では、自由に音を出すよりも、自発的に「曲を演奏したい」という気持ちが芽生えていたという点が印象的であった。特に年長児においては、普段の園生活の中でも歌詞の意味をイメージしながら歌ったり、自分のことだけではなく他者とのかわりの中で自己を表現するということがある程度出来る発達段階であるため、コンサートを聴いたことによって、より具体的に自己を表現したいという意欲が高まり、各クラス

でキーボードを喜んで弾いたり、ピアノを習い始めるなどの行動に繋がっていったということが考えられる。それぞれの年齢、発達段階に応じて、程度の違いはあれど、それぞれの心に確実に残るものがあったと感じた。

4. 演奏者から見た園児たちの様子

「0歳から聴けるコンサート」やアウトリーチコンサートと同様に、演奏者から見た園児たちの様子について気付いたことを話し合った（表10）

表10 天童幼稚園・卒園おめでとうコンサートでの演奏者から見た園児たちの様子

- ・聞き方が様々である。音楽が聴こえると自然に体を動かす子もいれば、じっと真顔で動かずに聴いている子もいる。当初、後者の子供たちはつまらないと思っていたが、楽しくないわけではなく、集中し全身を使って聴いて覚えていると気付いた。最初に真顔で聴いていた子供たちが、何回か演奏を聴いていくうちに急に歌い出したり踊り出したりしていたからある。このように、一度だけの体験ではなく、何度も生演奏を聴く機会を持つことにより、子供たちの記憶にしっかりと残り、いい影響を及ぼしていくのではないかと推測される。
- ・オープニングの音が鳴った瞬間に集中して音を聴く姿勢になり、未満児の園児たちでも意識を向けてくれていたのが分かった。
- ・ドレスを着ていることで、園児たちが「日常とは違う空間だ」という思いが強く生まれるのを感じることができた。特に女子たちは、お人形遊びなどの情報で知っているドレス姿が現実になっていることにまず興奮するようだった。
- ・聴いたことのない曲だったとしても、間近で音が鳴っていることが非常に重要だと感じた。演奏している姿を目で見ることもまた、違った刺激になるのだと感じた。
- ・幼稚園や保育園に入ると、それぞれのコミュニティが確立されているためか、曲を『知っている』『知らない』というフィルターを通した捉え方が大きく影響しているように思う。

上記のように、子どもたちの聴き方は一つではなく、それぞれの年齢や性格などによって様々であると感じた。実際に、会場であるお遊戯室に入ってきた段階でこのように、自己を表現する方法は多様性に満ちており、個々のタイミングや方法で自分なりに表現をするということが言えるだろう。

また、ドレスを着ていることによって、「非日常」の空間であることを印象付けるということも「生演奏」を行う上では非常に重要であると感じる。聴くだけでなく、実際に見ることも刺激となり、「非日常」のある種の緊張感の中での体験がより深く、記憶に残るのだと感じた。

VI. 結果と考察

天童幼稚園でのアウトリーチコンサート、前述した「0歳から聴けるコンサートシリーズ」、各施設でのアウトリーチコンサートを通じて、「生演奏」の与える様々な影響は、演奏者が感じているよりも更に大きいことを読み取る事ができた。

そして、その影響は、冒頭に述べていた新たに施行された幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、保育所保育指針の中での「幼児期のおわりまでに育ててほしい姿」に示されている『豊かな感性と表現』の自発的な広がりにとどまらず、他に示されている『健康な心と体』『自立心』『共同性』『道徳性・規範意識への芽生え』『社会生活との関わり』『思考力の芽生え』『自然との関わり・生命尊重』『数量・図形、文字への関心・感覚』『言葉による伝え合い』にも密接に関わり合い、深く影響しているということが言えると考えられる。

既に述べているように、実際に生で音楽を聴くこと、そして、一緒に体を動かしたり、楽器を使って一緒に演奏することによって、子どもは音楽を自分の心でダイレクトに感じ、それを自分なりに表現することが出来るようになっていくと考える。また、生演奏であるがゆえの、演奏者が醸し出すある種の緊張感を感じ取り、子どもは周囲が思う以上に非常に集中して音楽を聴くことが出来るとも感じた。このように、普段、接している保育者や保護者以外の他者（演奏者）との関わりの中で、自分がどのようにふるまわなければならないかを自ら考え、実践している点は、自分と相手のイメージをすり合わせ、葛藤や共感する様子から見られる『道徳性・規範意識への芽生え』や、『社会生活との関わり』の部分に相当すると思われる。

さらに、コンサート実施後の子どもたちの様子の中で、非常に特筆すべき点があった。それは、コンサート実施後に、クラスでキーボードを弾いたり、お友達にピアノを披露してみせたという子どもたちの様子である。「普段は進んで人前で何かを披露しない園児が、自ら進んで人前に立っていたという点で非常に驚いた」との先生方からのお話があった。これは、工夫しながらあきらめずにやり遂げたり、自信をもって取り組む姿である『自立心』にあたるものと言えるだろう。コンサートを通して、心の中に何かしらの変化をもたらすことが出来ていたという点が筆者にとっても非常に嬉しく、新たな発見であった。

コンサート実施後に、保育者や友達、保護者に感想を伝える子どもたちも多く、実際に多くの保護者の方から「コンサートが楽しかった」「ドレスが素敵だった」「一緒に楽しく歌えた」などと子どもたちが話し

ていたと筆者が伝え聞くことができた。このように、園児同士や園児から保護者や保育者へと『言葉による伝え合い』をすることで、『協同性』が生まれ、様々な人との関わりの中で互いの思いや考えなどを共有することにより、記憶の中に鮮明に残るのではないかと推測される。

プログラムの中には、演奏者と一緒に体を動かしたり、手拍子をする場面、また、リズム打ち（演奏者が見本を見せ、真似をしてやってみる）という場面を意図的に設けている。子どもたちの心と体の緊張をほぐしリラックスさせて、さらに集中して音楽を聴き楽しめるようにと考えて取り入れているものであるが、これは『健康な心と体』の、「充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活を作り出すようになる。」に通じるものと言える。心と体を十分に働かせることによって、自発的な表現の促進にも繋がっていくのではないだろうか。

また、特に年長児に言えることではあるが、単純に演奏を聴くだけではなく、その歌詞やそれぞれの曲の背景にまで考えを及ぼすという点については、『思考力の芽生え』や、『数量・図形、文字への関心・感覚』の、文字への関心・感覚という部分にあたるものと言える。プログラムに演奏する季節に合った童謡を取り入れているのは、子どもたちに日本の美しい四季の様子を感じてほしいとの思いからであるが、自然の美しさ、季節の移り変わりへのイメージを持つことは、『自然との関わり・生命尊重』に通じるものと言える。そして、歌詞や曲の背景に思いを馳せ、自分なりの思いを持つことは、まさに、その後の小学校教育へと繋がっていく重要な部分の一つではないだろうか。

このように、冒頭にも述べていたが、「幼児期のおわりまでに育ててほしい姿」とは、保育や幼児教育において生まれ、その後の小学校教育、そして大人になっていく過程において、非常に重要な「核」となる部分であると感じる。その中で、「生演奏」が与える影響が、子どもたちに様々な影響を与えていることが、今回の研究を通して見えてきた部分である。

さらに、子どもたちだけでなく、幼稚園・保育園の保育者や保護者が楽しんで生演奏を聴くということも、子どもたちにとって非常に良い影響を与えるということが、各アンケートを通して読み取れた。どちらかが一方的に与えるものにならず、演奏者・保育者・保護者・子どもたちと、会場のすべての人が体験を共有することが、「生演奏」の非常に重要な点であり、意義であり、醍醐味であると考えられる。

また、既に述べていることだが、「生演奏」を聴く

ということは子どもたちにとっては「非日常」の体験であると言える。人間の記憶には「意味記憶」と「エピソード記憶」という大きく2つの種類に分けられている。「意味記憶」は、覚えようとして知識を吸収することであり、一般的な学校の「勉強」はこの「意味記憶」に相当する。本人の、「これを覚えよう」という意思が働くのが特徴である。対して、「エピソード記憶」は、「体験したことを覚えている記憶」のことで、特に覚えようという意識がなくても自然に覚えている記憶であるという。³⁾

「非日常」の体験は、まさにこの「エピソード記憶」に記憶されるのであろう。「体験したことを覚えている記憶」によって、心の中には確かにその体験が息づき、心や体が成長していくと共に、自分自身で様々なことを表現する力を育てていくのだと感じた。

以上のように、「生演奏」と一口に言っても、これまでに述べてきた通り、様々な要素が密接に関わり合い、子どもたちの健やかな成長を促す一つの重要なツールとなっていることは、今回の研究における大きな発見であると言える。

VII. おわりに

今回の研究を通して、「生演奏」の形や、より良いプログラムなど、今後も継続的にコンサートを実施していく中で検証し、改善する点は多々あると感じている。「0歳から聴けるコンサートシリーズ」では、来場者に毎回アンケートをお願いしていたが、年齢層がある程度固まっているような、各保育施設のアウトリーチコンサートでの可能性も探っていく必要を感じた。今後はアウトリーチコンサートの来場者や主催者にもアンケートやご意見を伺いながら、更に研究を続けていきたい。

また、今回の研究ではクラシック音楽や童謡などのある一定の分野について主に取り上げているが、今後は、ジャズやポップス、様々な演奏形態など、多岐にわたるジャンルの生演奏においての子どもたちの反応についても研究の余地があると考えている。

何よりも筆者自身が音楽を楽しみ表現し、楽しんでいる心を子どもたちと共有できるよう、様々な角度から今後も「生演奏」を実践していきたい。

註

(註1) 県内外で活躍する音楽団体「チアーズ」では、過去5年間の間に、アウトリーチコンサートの公演回数が一年に5～6公演ほどであったという。

(個人的な公演も含む) また、筆者個人としての

保育施設での公演も近年増加していた。他にも様々な団体が、継続的な活動ではないにしろ、活動の幅を広げている。

(註2) 山形テルサ事務局のご協力のもと、過去のデータベースから山形県内の公演数を検索したものである。

参考・引用文献

- 1) 無藤隆・汐見稔幸 (2017) イラストで読む! 幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領はわかりBOOK
- 2) 萩原恵里・木村文子 (小田原短期大学通信教育サポートセンター大阪) (2018) 幼稚園における音楽アウトリーチの可能性 幼年教育WEBジャーナル 第一号 pp2～4
- 3) Concert square インターネット (<https://www.concertsquare.jp/concert/search/preschoolchild>)
- 4) エピソード記憶 インターネット (<http://bsd.neuroinf.jp/wiki>)
LEARNTERN インターネット (<http://learn-tern.com/episodic-and-semantic/>)

SUMMARY

Hisako SASAKI,
Keiko KUDO,
Chisato SATO,
Miho AOYAGI:

A Study on the Importance of "Live Music" in Childhood
– Explore the Spontaneous Spread of "Rich Sensibility and Expression" –

In April 2018, new kindergarten education guidelines, child care-based certified children's kindergarten education and childcare guidelines, and nursery school childcare guidelines were introduced, showing "the way we want them to grow up by the end of early childhood." In this study, based on a questionnaire survey of parents and nursery school teachers, we investigated how "live music" of music affects children in their infancy and how each person's expression spreads spontaneously while actually performing outreach concerts. As a result, he was closely involved in the appearance that he wanted to grow up by the end of infancy, and came to think that it had an influence.

(H.SASAKI; Part-time Lecturer of Uyo Gakuen College
K.KUDO, C.SATO, M.AOYAGI; Tendo Kindergarten)

